

# タイにおける相互行為と社会秩序の民族誌試論

## —理論的背景を中心に—

高 城 玲

### 要旨

本稿の目的は、タイ社会をマクロな政治経済的な制度論の分析のみではなく、日常の相互行為を通じて社会や秩序、政治経済が生み出されていくというミクロな視点からも照射するための予備的考察とすることである。同様の目的の為に先の拙稿 [2009] では、ミクロな分析を特徴とするタイの人類学的な研究が、相互行為と社会秩序に関してこれまで如何なる議論を積み重ねてきたのかを整理した。その延長線上に本稿では、相互行為と社会秩序をめぐる問題に関して、タイの文脈を離れたより広い分野の研究が理論的にどのような議論を積み重ねてきたのかに焦点を当てて検討し、残された問題の所在と今後の研究視座を提示する。

取りあげる理論的背景は、人類学あるいは周辺諸科学のものを対象とし、「方法論的個人主義—バルト」、「言語行為論—オースティン、サール」、「儀礼的コミュニケーションと日常的コミュニケーション—ブロック」、「エスノメソドロジー」、「共在の場における対面的相互行為—ゴッフマン」、「オートナーによる整理」、「ハビトゥス、戦略、象徴権力—ブルデュー」という7つの論点から整理する。

結果、特にブルデューとゴッフマンの議論を中心に、プラクティスの議論を軸に相互行為の過程という視座から具体的な民族誌記述を重ねて行くことの重要性を導き出す。具体的には、今後の研究方向において、第1に、ゲームのセンスによって慣習的に遂行されていくプラクティスのやりとりのミクロな過程に徹底的にこだわり、相互行為と社会との連関に焦点を当てていくべきこと、第2に、その過程を具体的な場所と時を持った行為の場所から、微細な厚い記述のタイの民族誌的記述として明らかにすべきこと、という2点を課題として指摘する。

キーワード：相互行為、社会秩序、過程、言語行為論、エスノメソドロジー、  
プラクティス

## 1 はじめに

東南アジアの中でもタイは、いくつかの危機を乗り越えながら、「民主主義」と「経済発展」へと向かう国として認知されてきた。特に、首都バンコクの都市部を中心に、1980年代末に二桁の実質経済成長率を遂げて以降、バブルとも言われた経済の飛躍的拡大や消費社会の到来などが指摘され、「中進国」タイへと変貌を遂げていく過程が注目された<sup>1</sup>。その後、1997年には一転してバブル経済の破綻がアジア通貨危機の引き金となったが、2001年にタクシン・チナワット<sup>2</sup>が政権の座に就くと、強力な主導力で経済立て直しを図ったことから、危機をくぐり抜ける道筋を開いた。

他方政治的には、アジア通貨危機の中で、一般国民もその制定過程に参加した「1997年憲法」が公布され、まさに東南アジアにおける「民主主義」の優等生としてメディアでも多く取りあげられていた。しかし2006年以降は、タクシンを巡って逆に各派の対立が引き起こされ、現在に至るまで大きな混乱を招いている<sup>3</sup>。2011年8月には選挙を経てタクシンの妹インラックが首相の座に着いたが、対立の火種はまだ消えていない。何より、「民主主義」の優等生と目されてきたタイの首都が封鎖され、実弾が飛び交い、目抜き通りを装甲車が行き交う近年の様子は非常に衝撃的だった。

このように近年のタイ社会は大きな混乱の渦の中にある。では、タイがこれまでの「発展」と「民主化」の中で経験してきたこととはいったい何だったのか、現在その再考を迫られると言えるだろう。

これまで、タイの社会的状況は、主に統計を主とする経済学的な分析か制度論を中心とする

政治学的な分析という政治経済的な視点から説明されることが多かった。もちろんそうした政治経済的なマクロな視点も重要で不可欠なものである。しかしながら、そうした視点で忘れ去られがちなのは、政治や経済を動かしている人間への注目ではないだろうか。特に、そこに育まれた歴史や文化を背負っている人間が、どのような行為を通じて日常を生き、政治経済を含めた社会とどのように関わっているのかというミクロな視点からもタイ社会を照射する必要があると言えるだろう<sup>4</sup>。つまり、政治的な制度や経済的な統計に偏りがちな分析のみから社会を論じるのではなく、そこに住まう人々の具体的な行為に着目し、行為を通じて如何なる社会関係や秩序が生成され、また、行為を通じて如何に政治経済や社会を立ち上げていくのかというミクロな視点からもタイ社会を究明することが求められているのである。混乱の中にあるタイ社会を、社会を担う人間、中でもその行為というミクロな視点から捉え返し再考していくことは、現在求められている喫緊の課題である。

本稿は、政治的な制度論や経済的な統計分析よりも、人々がそうした制度や経済をどのような行為によって担っているのか、つまり具体的な顔の見える相互行為として如何に社会やその秩序を生きているのかを究明するための試論である。また、具体的な相互行為を分析し、社会秩序や政治経済との関係を考察する為の予備的考察でもある。

同様の目的をもった予備的考察は、既に拙稿[2009]で行っている。そこでは、タイにおける相互行為と社会秩序が如何に関わるのかという問題に対して、ミクロな分析を得意とする人類学的な研究が取り組んできた研究の歴史を紐解き、残されている問題を明らかにした。但し、

<sup>1</sup> 末廣[2009]などを参照。

<sup>2</sup> 2006年9月のクーデターまで首相の地位にあった。タクシン元首相に関しては、McCargo and Ukrist[2005]、Pasuk and Baker[2009]を参照。

<sup>3</sup> この間の政治経済的な動向に関しては柴田[2010]、日本タイ協会編[2008]、Nostitz[2009]などを参照。

<sup>4</sup> 別稿では、現代タイの政治を具体的な相互行為の過程から論じた[高城 2010]。また、コミュニティに対する国家による統治を相互行為の過程という視点から論じている別稿も参照[高城 印刷中]。

そこで取りあげた研究は主にタイの人類学的研究や民族誌に分野を限定していた。これまで歴史的にも多くの研究が積み重ねられてきたより広い文脈の理論的な研究史に関しては、紙幅の関係上、十分に検討することが出来なかった。そこで本稿は、タイの文脈に限定しないより広い理論的な行為と社会に関する研究の背景を論じる。先の拙稿と本稿を合わせてこれまでの研究史を整理し、残されている問題の所在を改めて明らかにすることで、タイにおける具体的な相互行為と社会との関係分析へ向けての序論としたい。

相互行為と社会をめぐる理論的な研究は、ミクロとマクロのリンクなどとして歴史的に膨大な数の研究が積み重ねられてきた。本稿では、その全てに言及することは出来ないが、主に人類学あるいは人類学に影響を与えた周辺諸科学のものを対象として取り上げる。

以下では、大きく分けて「方法論的個人主義—バルト」、「言語行為論—オースティン、サール」、「儀礼的コミュニケーションと日常的コミュニケーション—ブロック」、「エスノメソドロジー」、「共在の場における対面的相互行為—ゴッフマン」、「オートナーによる整理」、「ハビトゥス、戦略、象徴権力—ブルデュー」という7つの理論的背景を検討し、そこに残された問題の所在を明らかにしていく。

## 2 理論的背景

### 2-1 方法論的個人主義—バルト

まず、人類学的研究において個人と個人の行為を中心に社会の分析を目指したものとして、フレドリック・バルトによる方法論的個人主義<sup>5</sup>を取り上げたい<sup>6</sup>。バルトは、パキスタンのスワート社会における政治的リーダーシップを描いた民族誌の中で、それまで人類学的な理論の中心を担っていた構造機能主義による全体や集団を中心とする考え方に批判を加えている [Barth 1959:1-2]。構造機能的な理解では、個人は特定の構造的集団に生まれることで、生まれながらに決められた集団のある人物に政治的な忠誠を誓うことになり、そこに個人の自由な選択の余地は認められないことになってしまう。それに対してバルトは「どんなときにも自由に新しいリーダーに自分の運命を任せることができる」 [Barth 1959:81]、「みんなが自由にどの集団に属したいかを選ぶことができる」 [Barth 1959:22]、「人々は一連の選択を通じて政治秩序に自分の場所を確立する。そして、その選択の多くは一時的なものであり、またいつでも破棄できるものなのである」 [Barth 1959:2] として、そこに個人の自由な選択の行為という要素を導入する視点をうち立てた。つまりこれは、それまでの構造機能主義において予定調和的な全体としての社会を想定し、個人に着目することが少なかった点を決定的に退け、社会には前

<sup>5</sup> オートナー [Ortner 1984] による人類学理論の整理を参考にすれば、他に、カプフェラー [Kapferer 1976] やレイモンド・ファース [1978] などにも個人の行為に着目する姿勢がみられる。特にカプフェラーの研究方向はトランザクション論 (transactionalism) とも呼ばれ、都市社会における社会関係を対象にしたネットワーク論などもこの研究方向に含まれる。ファースは、事象を統一的構造の全体系の中に閉じこめてしまう構造機能主義を批判し、日常生活における個人の選択や意志決定の可能性を重視する立場を表している [ファース 1978]。ファースの提示する社会構造の概念は、その持続性を一方で認めながら、他方では個々の行為者の選択と決定にもとづく行為の可能性を認め、後者を社会組織 (social organization) として概念的に区別するところにその特徴がある。つまり、諸部分の全体に向けて秩序づけられた関係の原理を意味する社会構造と、個々の行為者の選択と決定による社会関係の体系的に秩序づけられた統合を意味する社会組織とを概念的に明確に区別したのである。そこでは、個人が構造の規則を受け入れるか否かの選択を可能とする余地が見いだされている。また、エドモンド・リーチにも構造機能主義を批判し、個人の利害や選択を重視する方向性が見取れる [リーチ 1987]。

<sup>6</sup> バルトの仕事をめぐるのは、田中 [1995、1998] が、人類学的な理論の中での位置づけをしている。

提としての機能的な全体、まとまりがあるのではなく、むしろ富や権力を求めて競合する個人から成り立っているのだという立場の表明であった。

バルトが、全体的な所与の社会観に対して、個人という視角を重視したことは、諸個人間の相互の行為を考える際に重要となる。また、個人を重視する立場にたつて、そこからボトムアップに社会が生成されていくという動的な過程を考察の射程にいられたことは、過程という側面から行為と社会との関係を究明しようとした点でも重要な指摘である。

ただし、バルトのとらえる個人とは、自らの利潤を最大化し、不利益を最小化するという合理的な利潤追求の個人である。そこでは、自由な選択や行為が可能であり、それを前提とする駆け引きを通じて他人と関係を結んでいくという姿が描かれることとなる。いわばそれは西欧近代資本主義における合理的な個人像を彷彿とさせるものである<sup>7</sup>。そのため、ここで描かれる個人像が他の社会にも適用できるのか、問題が残る。また、自由な選択や行為を強調することで、行為における拘束性を軽視してしまう可能性もある。この点は拙稿[2009]で取りあげたタイのパトロン・クライアント関係の議論における個人観、行為観と相通じる。

## 2-2 言語行為論—オースティン、サール

個人の行為という視点からその後の人類学的研究に大きな影響を与えたのは、オースティンらによる言語行為論 (speech act theory) である。オースティンの理論は、日常言語学派 (ordinary language school) 哲学とよばれるように、日常言語をその不完全で曖昧さのゆえに分析から取り除こうとする代わりに、人々がそのような不完全な言語を用いて、これほど上手にやっつけていけるのは何故なのかを理解すべ

きだと主張する。彼の主著の原題が「いかにしてことばを用いてことをなすか」<sup>8</sup> となっているのは、この主張を的確にあらわしている。

オースティンは、発話が必ずしもものごとの状態や事実の記述のみにあるのではなく、その発話自体がある種の行為の遂行を果たしているという一面を明らかにしている。つまり、発話の記述的な真偽よりも、その発話が行われるという行為遂行的 (performative) な側面を重視するのである。その上で、何ごとかを言う発語行為 (locutionary act) を遂行することは、同時に、それ自体において、もう一つの他の行為、すなわち何かを言いつつ行っている別の行為である発語内行為 (illocutionary act) を遂行することになるとして、その発語内の力 (illocutionary forces) に着目する [オースティン 1978:170-173]。例えば、「私は論文を書くことを約束します」という発話は、文法的、記述的な発語行為の遂行だけではなく、この文を発話することによって「約束します」という発語内行為を遂行しているのである。

その上で、この発語内行為が適切な力として遂行されるためにオースティンが強調しているのが、慣習的な (conventional) 制約である [オースティン 1978:177-181]。彼は、発語内行為の例として結婚式や進水式などにおける宣告、宣言の発話を挙げているが、そこには、儀礼的な色彩の濃い発話が、一定の慣習によって制約されていること、つまり、発話の際の発語内の力が慣習によって決定されるものであることを示している。ここでは人間の慣行としての言語の行為遂行性に注意を引きつけることとなる。

この発語内行為における慣行としての行為遂行性の議論をその後展開していったのは、サールの言語行為論である [サール 1986]。サールは、オースティンによる慣習的という議論を、規則にしたがう (rule-governed) という概

<sup>7</sup> 田中 [1995:20, 1998:88] を参照。

<sup>8</sup> *How to Do Things with Words* が原題である [オースティン 1978]。

念で捉え返す [サール 1986:58-60]。そして、規則を統制的規則 (regulative rule) と構成的規則 (constitutive rule) の二つに分類し、発語内行為が従うべき規則は、後者の構成的なものであるとした。構成的規則とは、ある行為が規則から独立しているのではなく、規則によって行為そのものが構成される、そのような規則を意味する。つまり、言語的な行為は、慣習的な規則によって構成されることで、適切なものとして発語内の力を持ち得るのである。

これらオースティン、サールらの言語行為論は、日常における言語の行為遂行性の概念を提起し、日常生活における言語的な相互行為を究明するひとつの道筋を示してくれたという点で重要である。また、言語的な相互行為が、発語内行為の遂行性として、規則、すなわち慣習と密接に関係しているという視角を切り拓いてくれた点も銘記しておきたい。特に、人類学においては、拙稿[2009]でタイの人類学的研究として取りあげたタンバイア<sup>9</sup>や次に取り上げるブロックらの儀礼研究に大きな影響を及ぼしていくことになるのである。

### 2-3 儀礼的コミュニケーションと日常的 コミュニケーション—ブロック

オースティンやサールらの言語行為論に影響を受け、人類学において特に儀礼における言語や発話のあり方の研究として深化させて行ったのがモーリス・ブロックである。ブロックは、それまでの機能主義における儀礼研究や儀礼の象徴論的研究が、社会や文化という全体を前提とし、その中で儀礼がいかに機能するか、あるいはいかに説明として全体の枠の中で記述されるかという還元主義に陥っているとして批判

する [ブロック1994:5-23]。そして、儀礼のもつ特有な行為、コミュニケーションのあり方に着目し、同時にそれが社会経済的な過程、歴史といかに関係し、いかに変化、持続していくのかを究明している [ブロック1994]。

彼は、儀礼に特有なコミュニケーション、行為として、呪文や歌、ダンスなどに注目し、それが、日常の発話や行為とは違って、非常に形式的で、何度も繰り返され反復されることを指摘する [Bloch 1989:19-45、ブロック1994]。こうして儀礼という文脈での形式化された発話や行為は、バルト等の前提とする自由な行為とは逆に、慣習的に拘束された、硬直的なものであり、それが幾度も反復されると、儀礼の場にいる人々は、その形式以外の発話や行為を封じられることになる。こうした儀礼的コミュニケーション (ritual communication) の過程を経て、祖先や長老たちの権威、権力が正当化され、秩序が形成されていく過程をブロックは描き出すのである [ブロック 1994]。

また、ブロックは認知、コミュニケーションのあり方として、儀礼的コミュニケーションのほかに、人と人、あるいは人と環境との直接的な関わりから生まれる日常的コミュニケーション (everyday communication) の存在を指摘し、後者での形式的ではない行為を示唆する [Bloch 1977:287]。つまり、前者が社会の秩序化に向かう一方で、後者には社会の変化を可能とする契機を見いだしている。

ここで、ブロックが儀礼における行為の遂行性に焦点をあて、その形式性、慣習的な拘束性から、社会が秩序化の方向で作り上げられていく過程を示したことは重要な指摘である。しかしながら、それが儀礼以外の日常生活の場において、どのような相互行為として遂行されていくのか、具体的な分析を展開していく余地が残

<sup>9</sup> タンバイアは東南アジア大陸部を中心とする一連の宗教研究を行い、中でも象徴論や全体的な構造体系を軸に宗教と政治との関係を議論の俎上に載せた。その後1985年の研究では、オースティンやサールの言語行為論を儀礼分析に取り入れる必要性を理論的に唱えていく [Tambiah 1985]。しかし、タンバイア自身がこの視点を具体的な儀礼行為分析に活かすことはなかった。

されているように思われる。この点は、拙稿[2009]でタイの人類学的研究として取りあげたタンパイアや田辺[1993]らの議論にも通じる。

ブロックは、儀礼以外のコミュニケーション、認知過程との往来も視野に入れようとするが[Bloch 1977, 1991]、もし、儀礼と日常の認知、行為を排他的に分けてしまえば、儀礼過程の相互行為のみに社会の秩序化への契機が特化されてしまい、日常的場の相互行為における行為の拘束性や社会の秩序化へと向かう契機を見逃してしまう危険も生じることになる<sup>10</sup>。ここで求められるのは、儀礼以外の日常生活の場における相互行為を、その社会との関係を視野に入れた過程の中に描き出そうとすることであろう。

## 2-4 エスノメソドロジー

言語を単に記述的なものとみるのではなく、日常生活との関係で捉える視角は、ガーフィンケルらによる社会学の一潮流、エスノメソドロジー(ethnomethodology)にも見られる<sup>11</sup>。そこでは、日常生活の会話をその担い手の視点から見た相互行為として捉えるのである。彼は、「エスノメソドロジーの研究が日常活動を分析するのは、その日常活動をありふれた日常活動として、あらゆる実際的目的にとって合理的に見え、また報告できるものにしていく、つまり、説明可能にする(accountable)メンバーの方法として分析するのである」[Garfinkel 1967:vii、ガーフィンケル 1987:16]として、日常生活における最もありふれた活動である相

互行為、会話を分析の対象としていく<sup>12</sup>。

その際の分析の特長は、人々の行為と発話が、インデックス性(indexical)、つまり状況依存、文脈依存性であって、たえず時間的な文脈の中においてのみ意味を生みだしている、という考え方にある[クロン 1996:39-47]。つまり、ここで発話とは、その発話の担い手である会話のメンバーにとって、それが使われるその時、その場の状況と文脈があってはじめて、意味を持ち得るということになる。こうして、エスノメソドロジーは、その時、その場(いま、ここ)の文脈における相互行為や会話の分析を限りなく重ねて行き、状況、文脈に応じて生みだされた意味を日常的達成(everyday accomplishments)として日常生活との関連で考察していく。そして、このような日常的達成が日常生活やその秩序を構築していくというのである[Garfinkel 1967:9-11]。

こうして、エスノメソドロジーも、それまでの構造機能主義を批判し、個人の行為や発話、言語が単に社会や全体の記述としてとどまるのではなく、意味や秩序を生みだすほかならぬ基盤であることを示しているのである。このように、日常生活の会話を相互行為として捉え、状況や文脈に応じて、意味や秩序が生みだされていくという視点を示したことは重要である。

しかしながら、人々の相互行為や会話の、状況依存性、文脈依存性の側面を強調するあまり、その行為や発話を担い手であるメンバーの視点のみから捉え、客観的観察者としての視点から切り離してしまう危険性がつきまとう。この点は、拙稿[2009]でタイの人類学的研究として取

<sup>10</sup> ブロックの議論に関して、田辺は「儀礼では、発話内行為が支配的となり、発話の意味を問うたり議論する余地は極小化される、と彼(ブロック)は考える。しかし(中略)多くの儀礼場面では、じつは何ごとかをいうことと何らかの行為を遂行することは、ブロックの言うように排他的に分別されるものではない」[田辺2002:11]とする。田辺[2010:9]も参照。また、田中は、儀礼のみに主体形成という構築的機能を求めることは、儀礼の効果を過大評価することになり、日常生活における対面的な権力作用を無視するという意味で疑問が残る」[田中2002:344]とする。

<sup>11</sup> エスノメソドロジーなどの研究を現象学の一環と捉え、人類学との関係を考察したものとしては、浜本[1984]を参照。

<sup>12</sup> タイをフィールドとしては、モアマンがタイ・ルー族のエスノメソドロジー的研究として会話分析をおこなっている[Moerman 1988]。

りあげたモアマンの議論にも通じる。

このようなエスノメソドロジエ的視点を批判したのが、後に取り上げるブルデューである。ブルデューは、「相互行為の真実はけっして相互行為のなかに完全に含まれていない。このことは社会心理学や相互行為論あるいはエスノメソドロジエが忘れていものである。それらは集まっている人々との関係の客観的構造を、その特定な場の状況と集団のなかにある彼らの相互行為のその都度の偶然的出会いの構造に還元してしまうのである」[Bourdieu 1977:81]としている<sup>13</sup>。いわば、エスノメソドロジエは、行為者の視点から主観主義的に相互行為そのものだけを分析するに止まっており、その背後にある「客観的」な社会関係、構造と言う概念を決定的に欠いていると批判しているのである<sup>14</sup>。

しかし、このような批判を背景として、近年のエスノメソドロジエ自体もその研究の射程を社会の構造、特に権力作用との関係にまで拡げつつある。そこでは、エスノメソドロジエの概念道具を越えてミシェル・フーコーの権力概念を導きの糸としつつ、「課題は、ローカルなくいまここ」の場面でどのような権力作用が働いているのか明らかにすることであるし、権力作用の作動を通して、どのような『客観的現実』が構成されているのか記述することになるだろう」[山田・好井編1998:73]としている。このような考えをもとに、近年の批判的エスノメソドロジエの会話分析では、病院や施設、学校など様々な場面における差別や排除の問題、

そこにおける権力作用の問題で研究の蓄積を重ねている<sup>15</sup>。

こうして日常の会話や相互行為を、主観主義的な行為者の視点を越えた社会関係や権力、構造との関係にまで拡げて究明しようとする方向の重要性がここでは提起されているのである。

## 2-5 共在の場における対面的相互行為 —ゴッフマン

相互行為を徹底的に掘り下げ、主題化し、それを秩序との関係で捉える方向性は、アメリカの社会学者、ゴッフマンの研究においても大きな進展を見せた。

ゴッフマンは、人が他人と居合わせている状態、場面を共在 (copresence) とし、そこで行われる相互行為を対象として主題化する [ゴッフマン1974]。その上で、彼は、共在の空間的・物理的環境を状況 (situation)、また、そこに直接的に居合わせている身体群を集まり (gathering) と呼び、状況と集まりを意味づける文脈、単位を社会的場 (social occasion) とし、議論の精緻化をはかっていく [ゴッフマン1980:20、1985:2-7、1986:145]。ここで言う、社会的場とは、「広範な社会的事象、行為、あるいは出来事であって、場所と時間が定められており」、「多くの状況や集まりに社会的コンテキストを与え、それらを形成したり、解体したり、再形成したりするが、その過程で、ある型の行為がその場に適した、(しばしば) 公認

<sup>13</sup> また、ブルデューは別のところでも「集まった諸個人の間、ないし彼らの帰属集団との関係がもっている客観的な構造 (中略) を、ある状況あるいはある特殊な集団の中での相互行為がもつ時局変動構造に還元してしまい」[ブルデュー1988:251-252] と批判する。同様の指摘はブルデュー・今村・廣松 [1990:179-180] にも見て取れる。ブルデューの原文からの訳出には田辺 [2002b:12、2003:78-80] を参照した。

<sup>14</sup> 同様の指摘は、ギデンズにも見られ、「エスノメソドロジエの研究は、構造の連続体としての社会の再生産にはそれほど関心をむけない」とする [ギデンズ1986:120]。

<sup>15</sup> 例えば、申田、好井編[2010]、山田、好井編 [1991、1998]、山崎、佐竹、保坂 [1997]、好井編[2009]など。但し、一方で、こうしたエスノメソドロジエの新たな方向に対しては、状況とは無関係な理論や権力を恣意的に想定しており、分析する前から、この相互行為はどういったたぐいのものか、を観察者が恣意的に決めてしまうとする批判もある [Bogen and Lynch 1990、Lynch 1993]。特にエスノメソドロジエの原点に戻ることを主張するリンチは、研究者が当事者の立場に対して何らかのコミットメントをすることを批判し、そうしたコミットメントからは身を引いて無関心であるべきことを主張する。

の、あるいは予定されたもの—(中略)『慣習的な行動類型』—として承認されるようになる」ものである [ゴッフマン1980:20]。つまりゴッフマンは、相互行為が行われる場として、社会的場という概念設定を行い、そのことによって社会的コンテクストとの関わりに接近する手だてを示したと考えられる。

特にゴッフマン [1984] は、通常の社会的場とは異なる、精神病院という全制的施設 (total institution) における施設収容者の統制的で一括管理された世界も描き出している。

また、ゴッフマンは相互行為というものの中で、2人以上の複数の人々が直接的、身体的に居合わせるときの対面的相互行為 (face-to-face interaction) に重点を置き、精緻な分析を行う [ゴッフマン1980:18]。つまり、ゴッフマンにとって相互行為とは基本的に人と人とが居合わせる場の出来事であり、身体的存在としての人間の間を生じる出来事を指しているのである<sup>16</sup>。オースティン等の言語行為論やエスノメソドロロジーでは、言語や会話に重心が置かれていたが、ここで、ゴッフマンの指摘によって、言語や会話は、身体を介して互いに居合わせながら行われる間身体的な行為として、その分析対象がより明確になっていく。

こうしてゴッフマンは、主に英米社会における共在の場、社会的場の対面的相互行為を、様々な概念装置を駆使しながら分析していく。例えば、相互行為の参加者が互いのフェイス (face) を傷つけずに、あるいは護るように相互行為を行うという、日本語の「顔、面子」に近い概念を導入して議論を進めていく [ゴッフマン1986]。また、それ自体は意味をもたないむき出しの出

来事の流れを、何らかの組織だった意味あるシーンとして経験させる、経験の組織化の前提もしくはその原理として、フレーム (frame) という概念をうち立て、組織化、秩序化へと向かう契機を捉えようとしている [Goffman 1974]<sup>17</sup>。

こうした相互行為における秩序化を探る方向性は、ゴッフマンの仕事全般を貫いている最も重要な契機である<sup>18</sup>。彼はこの点を晩年、共在の場における対面的相互行為には、相互行為秩序 (interaction order) へと向かう契機が常に存在するとしている [Goffman 1983]。相互行為秩序は、ゴッフマンによれば「すべての状況にあてはまる行為の規則は、『状況にふさわしい』行為をせよということ」 [ゴッフマン1980:12] であり、この状況に適合した規則に従って、居合わせる人がみな状況にふさわしく振る舞っているならば、相互行為は秩序だったものとして進行するというものである<sup>19</sup>。つまり、相互行為には「状況にふさわしい」行為=慣行の働きが常に存在し、人々は相互行為のなかで、この慣行を自発的な振る舞いとして行っていくことで、秩序を生みだしていくのである。ゴッフマンはこのような相互行為秩序がいかに絶え間なく維持されていくのかを微細に分析していく。

こうしてゴッフマンは、日常の対面的相互行為の細部を丹念に分析することで、そこに社会を社会として成り立たせている秩序への核心があるものとして捉えようとするのである。そこには、初期のエスノメソドロロジーに見られるような、主観主義的な行為者のみの視点から飛び出し、秩序や社会といったより広い文脈で相互行為を捉えようとする視角が見いだせる<sup>20</sup>。この

<sup>16</sup> 対面的相互行為に関してはKendon [1988] も参照。また菅原 [1987] は、アフリカ、カラハリにおける対面的相互行為を主題としている。

<sup>17</sup> フレームに関しては、安川が「フレミングとは、プラクティスの問題であり、その運用への熟達の問題である」 [安川1991:11] として、後述の慣習的行為としてのプラクティスとの関連性を指摘している。

<sup>18</sup> ゴッフマンのこの点に関して、椎野 [1991] は、対面的相互行為を間身体的行為ととらえ直し、その間身体的行為から生みだされる儀礼秩序の重要性を指摘している。

<sup>19</sup> 坂本は、ゴッフマンのこの状況という議論が、社会決定論としての行為論からの新たな突破口になることを指摘している [坂本1989:271]。また、江原は、相互行為と社会的場面にに関して、「社会的場面に『適切に』行為できることが、その社会的場면을『理解』することなのだ」 [江原1995:23] とする。

点は本稿の目的との関係で銘記すべきであろう。

しかしながら、筆者がフィールドとするタイの農村という調査地での相互行為という視点から見た場合、注意を要する点も指摘できる。つまり、ゴッフマンが主に対象とした英米の特に中産階級の相互行為においては、自己の印象管理を特長とするパフォーマンス的要素が多く見いだされることになる<sup>21</sup>。そしてそこでの行為が、意識的、意図的操作が可能な戦略的パフォーマンスとしてのみ焦点化されてしまうのである<sup>22</sup>。ゴッフマンは一方で身体に着目し、「身体は慣習化された言語である」[ゴッフマン1980:39]としながら、他方でその描く行為者としては、常に欧米の個人像を対象にした、意識レベルにとどまっていた、無意識や慣習化された行為に着目することは少なかった。この点は、先述したバルトへの批判と同じである。また、この批判は、タイの人類学的研究の文脈で、ゴッフマンを参照しながら研究を進めるタイの研究者ワッサンにも相通じる点があると思われる<sup>23</sup>。

さらに、この点と関連して、ゴッフマンは確かに、相互行為と秩序、社会との関係究明への方向性をもっていたと言えるが、その関係が十分鮮明に見えてこない。それは、彼自身が、社会構造と相互行為状況の構造との間に、緩やかな連動関係 (loosely coupled relations) を認めるだけにとどまっていることにもよる [Goffman 1983:11]。こうして、ゴッフマン

はある意味で行為者と社会構造という二分法を突破する方向性を秘めながら、行為とは独立した社会構造を前提とし、そこに緩やかな連動関係を認めるにとどまっていることによって、社会構造からの拘束性を十分につかみきれず、行為を自由に操作することができる意図的な行為者像を描き出すことになっていると考えられる<sup>24</sup>。

## 2-6 オートナーによる整理

人類学的研究の中で、方法論的個人主義的な行為観以降の研究の流れを後付け、行為と社会との関係の中での新たな行為観、つまり慣習的行為としてのプラクティスの重要性を指摘したのは、シェリー・オートナーである [Ortner 1984, 2006]。彼女は、個人の行為に着目した方法論的個人主義のシンボリック相互作用論やトランザクション理論では、個人の選択や決定が可能となる行為を念頭に置いていたのに対し、1980年代以降の行為理論は、社会システムとの関係の重要性をより考慮に入れて行くべきことを指摘する。つまり、構造機能的な全体論を一方で退けながら、社会システムがいかに堅固であり、どれだけ行為や相互行為を方向付けていくかという側面に注目すべきであり、相互行為は非対称的でかつ支配的な関係性の中で行われているということを踏まえておかなければなら

<sup>20</sup> ブルデューは、エスノメソドロジ的な研究とは一線を画しているとしてゴッフマンの研究を位置づけている [Bourdieu 1983:112-113]。

<sup>21</sup> この点に関して清水は、ゴッフマンの議論に対して、「機能的行為の機能的特性をさらに誇張した演劇的要素」に着目したものであり、「西欧近代社会に関する民族誌として読むべきである」としている [清水1995:15-17]。

<sup>22</sup> ゴッフマンの意識的、操作的行為者像に対する批判はアンソニー・ギデンスも指摘している。「彼は、無意識についてほとんど何も語っていない。(中略)既に動機づけられた主体を前提にしている。(中略)ゴッフマンの描く個人は、主意主義的な仕方である。ある与えられた社会環境に、全くの計算と戦略を通して適応していくシニカルな主体の代表である」 [Giddens 1984:70]。

<sup>23</sup> 高城[2009:150-151]、Wasan[2000]を参照。

<sup>24</sup> ゴッフマンは「相互行為的活動がその外部に依拠しているということは、(中略)それ自体では社会的構造への依拠を含意してはいない」 [Goffman 1983:12] としている。山田・好井編 [1991:251-252] の議論も参照。また、ハーカー・マハール・ウィルクスらは、「ブルデューにとって、構造の固有性は常に日常的な出来事と深く関わっている一方、ゴッフマンにとって構造は、遠い反響物にすぎないのである」 [ハーカー・マハール・ウィルクス 1993:13] としている。さらに田中は、ゴッフマンによる意図的行為の分析が、ジュディス・パトラーのパフォーマンスティヴィティの議論において、権力論と接合されることにより乗り越えられるとして、さらにその先の日常生活における共同性「パフォーマンスティヴィティのコミュニティ」に焦点をあてるべきことを主張する [田中2006:14-18]。

ないとするのである [Ortner 1984:146-147]。

その上で彼女は、社会システムがいかにかにプラクティスを方向付け、拘束するのかという側面と、プラクティスがいかにかに社会システムを形作っていくのかという側面の両者の重要性を提起する [Ortner 1984:152-157]。中でも特に、社会に拘束されたプラクティスが、いかにかに社会を再生産していくのか、また拘束されたプラクティスがいかにかに社会を変化させていくのかという過程の究明に向かうべきことを強く主張するのである [Ortner 1984:154, 2006:1-18]。

こうしてオートナーは、プラクティスの拘束的側面を新たな行為理論の視野に入れていく必要性を説く。また、プラクティスと社会との関係を、社会からプラクティスへ向かう拘束性の方向と、そうして拘束されたプラクティスがいかにかに社会やその秩序を形作っていくのかという方向として捉え返し、その具体的過程を明らかにすべきとした。これらの点は、これまでの相互行為をめぐる理論的背景から見て、非常に重要な指摘である。オートナーは、この新たな行為理論の背景として、ピエール・ブルデューによるプラクティス論を念頭に置いており、行為、相互行為をプラクティスと読み換えて議論を進めていく<sup>25</sup>。そこで、次にはブルデューのプラクティス論におけるいくつかの視点を見ておきたい。

## 2-7 ハビトゥス、戦略、象徴権力—ブルデュー

ブルデューのプラクティス論は、方法論的個人主義的な意識的行為を批判してしりぞけ、同時に、構造的拘束が規則的に行為を決定するという客観的構造の實在論的認識をも批判するなかで、新たな可能性を切りひらこうとするものである。つまり、その間の隘路を突破しようとし、構造を内面化した慣習的行為すなわちプラクティスがいかにかに社会的に構成され、そうしたプラクティスが社会といかにかにかかわって行くのかを理論的に検討しているのである [Bourdieu

1977、ブルデュー 1988、1990a、b、c、1993]。

その際の重要な概念が、構造を内面化するときのバビトゥス (habitus) である。ハビトゥスとは、「過去の経験を統合することで、常に知覚や行為の母胎として機能する」 [Bourdieu 1977:82] もので、身体にしみ込んだ慣習的性向であり、それが慣習的行為としてのプラクティスを生みだしていくのである。

ブルデューによれば、「ハビトゥスとは、持続性をもち移調が可能な心的諸傾向のシステムであり、構造化する構造として、つまり実践と表象の産出・組織の原理として機能する素性をもった構造化された構造である」 [ブルデュー 1988:83] とする。つまり、人々の間に心的諸傾向がシステムとして形成されたハビトゥスは、構造化されてはいるが、その人々の間に実践 (プラクティス) と表象を生みだし、組織化し、構造化していくものでもある。また、実践と表象を生みだす際には、構造化されたというハビトゥスの拘束性のために、その生成過程において一定の制約を与えることにもなるのである。

また、この点に関してブルデューは、「われわれが個人と呼ぶものがどのように社会構造によってかたどられているのか、それを理解することに関心があるのです。それは、社会構造の内面化と生成構造としてのハビトゥスの産出との問題です。ハビトゥスという概念は、生成構造なのです」 [マハール 1993:46] としている。

このようなブルデューの議論は、社会がいかにかに行為を方向付け、ハビトゥスやそれを母胎とする慣習的行為、プラクティスとして生みだされるのかという問いと、そうしてハビトゥスに方向付けられた慣習的行為、プラクティスがいかにかに社会や構造的秩序を形作っていくのかという問いという、オートナーが指摘した二つの問いの下敷きとなった観点である。ハビトゥスは、この二つの問いを統合して究明するための仕掛けであり、また、全体的構造を主にしてその枠の中にかに行為を位置付けない構造主義と、行

<sup>25</sup> 田辺 [1989、2003] も参照。

為を主として行為の中のみ構造を還元してしまう主観主義とを乗り越えようとする仕掛けとしての概念でもある。

特に、ブルデューは、ハビトゥスと社会とを結び、プラクティスを生みだす過程の媒介として、戦略 (strategy) という概念を導入する。それはフランスのペアルン地方における婚姻の考察、つまり、構造主義的な婚姻の規則によって全てが決定されるという側面を見直し、代わって戦略によって行為していく側面を捉えることから考察される [ブルデュー 1990a:5-98, 1991:96-122]。戦略とは、意識的、理性的な計算が生み出すものでもなければ、無意識的プログラムが生み出すものでもなく、ゲームのセンスのような実践感覚、歴史的に定義される個別な社会的ゲームの実践感覚で、子供の頃より社会的活動に参加することによって獲得されるものである [ブルデュー 1991:102]。つまり諸個人は、社会的なゲームの中に、戦略を用いながら、また同時に戦略を獲得しながら、ゲームのセンスによって調整された行為を行うことで、社会やその秩序へと参画することになるのである。ここで注目すべきは、規則が実体としてあるのではないということであり、規則から戦略へという視座の移行である。

ブルデューは、「民族学者が構築する親族関係の系図は、社会構造の公式の表象を再現しているにすぎない」 [ブルデュー 1990a:39] として、そうではなくて「親族の社会的用法」という視点を重視すべきだとする。つまり、それは「関係が、物質的かつ象徴的な利害の満足をめざして方向を定めている戦略の、そしてある一定のタイプの経済的かつ社会的な諸条件に照らして組織されている様々の戦略の産物である」 [ブルデュー 1990a:40] という視点である。こ

うして、「構造主義の伝統が描き出すような、血統と婚姻関係の規則の適用のみに立脚する、局部的で抽象的な作業ではなく、社会構造、ということつまり、社会的な営み [ゲーム] のある状態における一つの地位に本質的に内属する必要性の総体を、『仲介者』のゲーム感覚の総合的効力によって統合しようとする」 [ブルデュー 1991:112] 側面に焦点が向けられていくのである。

このようなハビトゥスや戦略、ゲームのセンスなどの概念を民族誌的な研究に取り入れるには、それと現実的な世界との関係が問われなければならない。ブルデューは、初期のアルジェリア農民の研究からフランスにおける趣味と階級を扱った研究にいたるまで、これらの概念を使いながら社会のあり方との関係を照射していくが、同時に概念自体の議論も深められている。ここでは、その中で、本稿の目的と関係するいくつかの視点を見ておきたい。

まず、ハビトゥスから生みだされるプラクティスがいかに慣習的行為として伝達されていくのかという点に関してブルデューは、他人の行為を模倣することに着目している。ブルデューは、「初心者模倣される実践や、(中略) 知らぬ間に無意識裡に会得するといった単に馴染むことによる学習」と近代学校教育との間に、「実践的習熟のあれこれの形式を伝承しやすい構造的練習問題がどの社会においても予め用意されている」 [ブルデュー 1988:120] とする。そして、練習問題の例として、儀礼や儀礼的試合、諺、格言、歌、謎々などを挙げている。模倣やこうした儀礼や儀礼的試合などの練習問題に参加することを通じて、ハビトゥスやゲームのセンスを涵養し、プラクティスが生みだされていくのである<sup>26</sup>。

<sup>26</sup> プラクティスのやり方を身につける過程に対する新たな視点は、レイヴとウェンガーによる「実践コミュニティ論 (community of practice)」に見て取れる [レイヴ・ウェンガー1993]。そこでは、新人が実践コミュニティの中へ正統的かつ周辺に参加すること (legitimate peripheral participation) によって、習熟者を見習いながら行為を繰り返してやり方に習熟していく過程に着目する。この点に関しては、田辺 [2002b, 2003]、福島 [2001] などを参照。福島は、「社会的行為論を学習理論の一部としてみる視座」を提起し、「暗黙の技能体系の習得過程」 [福島 1995:12] を「身体の構築学」として捉える。

また、ハビトゥスという概念がモース<sup>27</sup>の議論を参照していることから、行為の身体性と強く結びついている点が重要であろう。ブルデューは、ハビトゥスは「慣習的行動を実践のなかで方向づけながら、最も無意識な身振りのうちに、あるいは手先の動きや歩きかた、座りかたや澳のかみかた（中略）など、一見したところ最も無意味に見える身体技法のうちに、（中略）もぐりこませ」[ブルデュー 1990c:337] として、身体化された慣習的行為を重視する。ブルデューがこうした慣習的身体技法を重視するのは、具体的な身体の身振りによってハビトゥスが面前に呈示されるからでもある。つまり、慣習的身体動作が、構造化された構造としてのハビトゥスの性向を、可視化していくという側面である。

こうしてハビトゥスは、目に見える身体的行為として、社会やその秩序と関わり、特に社会の中の個人を分類し、差異化していく契機を担うことになる。彼の言葉を借りれば、ハビトゥスは身体的行為に現れ、同時に、「社会界の最も基本的な構築・評価原理、すなわち（階級間、年齢層間、男女間）の分業あるいは支配の分業を最も直接的に表現する諸原理を、身体および身体にたいする関係の分割形態のうちに投入する」[ブルデュー1990c:337] ことになるのである。

最後に取り上げるブルデューの視点は、「象徴暴力（symbolic violence）、象徴権力（symbolic power）」に関するものである。ブルデューは、ハビトゥスに方向付けられた慣習的行為、プラクティスがいかに社会やその秩序

を形作っていくのかという問いを考えるにあたって、相互行為の中の象徴の力に着目する。

彼によれば、「象徴の力関係は、社会空間の構造をなす力関係を再生産し、増強しようとする傾向がある」のであり、また「権力の客観的諸関係は、象徴権力の諸関係の中に再生産される傾向がある」のであって [ブルデュー 1991: 212-213]、象徴は単なる観念やコミュニケーションの機能に還元されるべきものではないのである。また、『話すということ』[ブルデュー1993]においても、言語を社会的諸条件から切断して成り立つ構造言語学を批判し、「言語の社会性は言語の内在的諸性格のひとつである」とするソシュールの言葉を徹底させ、言語はコミュニケーションの媒体であるだけでなく、象徴権力の再生産のあり方をしめしていることを説いている [ブルデュー1993:18、23]<sup>28</sup>。ただ、ここで注意すべきは、ここで言う再生産過程が、あくまで社会の中でゲームのセンスにもとづいたプラクティスの中において進行するというのであって、単なる機械的な再生産ではないということである<sup>29</sup>。

ブルデューは当初、『再生産』において「象徴暴力」という言葉を使い、「象徴暴力を行使する力、すなわちさまざまな意味を押しつけ、しかも自らの力の根底にある力関係をおおい隠すことで、それらの意味を正統であるとして押しつけるにいたる力は、そうした力関係のうえに、それ固有の力、すなわち固有に象徴的な力を付けくわえる」[ブルデュー・パスロン1991: 16] としていた<sup>30</sup>。つまり、象徴暴力とは力の

<sup>27</sup> フランスの社会学・人類学者で、デュルケームの伝統を受け継ぐ一方、個人の行為としてあらわれる「身体技法」が社会の中で構築されることに着目した。

<sup>28</sup> この点に関しては宮島 [1994:109-127] も参照。また、イギリスのクロスリーは、オースティンが理論化した発語行為が、ブルデューによる「社会的世界における権力のもっとも意義深い形態のひとつ、つまり象徴権力についての基盤を構成した」点を指摘している [クロスリー 2003:91]。

<sup>29</sup> ブルデューによれば、「諸々の象徴は、認識とコミュニケーションの手段として社会世界の意味に関するコンセンサスを可能にする。そしてこのコンセンサスが根本的に、社会秩序の再生産に貢献するのである」[Bourdieu 1979: 85] とする。

<sup>30</sup> また別のところでは、「名付けられた物事を『存在へと生産しようとする』（中略）のが社会的魔術というもののだが、これが成功をおさめるのは、これを完遂する人物が、かれの発言＝言葉に、当の言葉が—かりそめの篡奪であれ決定的な篡奪によって—一僭称するような権力を承認させる能力がある場合であって、この権力とは、社会界についての新たなヴィジョンを押し付け、（それによって）新たな分割を押し付ける能力、つまり、新たな限界線を聖別＝公認することなのである」としている [ブルデュー 1997:164-165]。

諸関係を基礎としながら、その関係を強め、かつ、その力の諸関係がそこにあることを不可視にしてしまうものである。

しかし、後には「象徴権力」という単語が多くなり、「象徴権力とは、Worldmaking〔世界を作ること〕の権力」であり、「言葉によって〈もの〉を作る力」だと指摘する[ブルデュー 1991:215-217]。つまり、言い表すことによってそれを意味化し、そこに隠れて見えなかったものを構成していく権力として捉え返す。ブルデューはこのことを星座の例を使って説明し、星座は、それとして指し示されて初めて存在するのと同様に、階級や性などの分類や諸個人の関係も、指示され、区別されて初めてそれとして存在するというのである。つまり、階級や権力的関係などはそこにあるが、それとして認識されていない状態を、指示、呈示し、明示し、命名することによって、それと分かるような恣意的な見方を押しつける遂行的な力、それが象徴権力である。星座は、恣意的なものであるが、指示され、命名されることによって、恣意的とは気付かぬ内に、星座として認識されるのである。

ブルデュー自身の言葉によれば、「象徴権力とは、言い表すことによって所与のものを構成し、ものを見させたり信じこませたりし、世界の見方を(中略)確固とさせたり変容させたりする権力であるが、この権力は恣意的なものとしては認識されない場合においてのみ、すなわち誤認、再認された場合においてのみ行使される」[Bourdieu 1979:83] のである。そしてこの象徴権力は、社会のゲームのなかで行使され、それが唯一で正しいとされる正統的な命名の独占権をめぐる「象徴闘争」のなかに投入さ

れていくのである。

ブルデューは、顔つきや姿勢から趣味嗜好まで、身体にしみ込んだ慣習行為として目に見えるかたちで関係の分割形態を示すことで、他との「差異化、卓越化 (distinction)」を行うというあり方を、『ディスタンクシオン』[ブルデュー 1990b, c] で描き出した。他方、象徴闘争の中でも、正統的な命名や分類、カテゴリーをめぐる差異化、卓越化の絶えざる過程が進行し<sup>31</sup>、それが「世界を作っていく」ことになるのである<sup>32</sup>。

以上のようにブルデューは、ハビトゥスやプラクティスが社会的に生み出され、作り出されるという側面に焦点をあてる一方、そうしてハビトゥスに方向付けられたプラクティスがいかに社会や秩序を形作っていくのかという視点をも合わせ持ち、プラクティスと社会との関係に切り込んでいった。そこに、戦略やゲームのセンスなどの概念を導入し、客観的構造的決定にも主観主義にもとらわれることなく、「構造化された構造」と「構造化する構造」の連環関係を解きほぐしていったのである。

しかしながら、ブルデューによって導入された概念には問題点も指摘されている。ミシェル・ド・セルトーは、「理論は、『構造』からハビトゥスへと移り、そしてこのハビトゥスから『戦略』に移り、この戦略が『情勢』に適合するのだが、この情勢とは『構造』のもたらす結果であり、その特殊状態なのであるから、これがまた『構造』にもどっていくわけである。実のところこのサイクルは、できあがったひとつのモデル(構造)から出発して、仮定されたひとつの現実(ハビトゥス)に移行し、そこから、観察された諸事実(戦略と情勢)の一解釈へと移行し

<sup>31</sup> 別稿では、タイの事例から差異が可視化され、権力が生み出されていく相互行為の過程を論じた[高城 2002、2011、Takagi 1999]。

<sup>32</sup> この点に関して宇都宮は、「ハビトゥスは、自覚されることはなく、それがあがる場が与えられ、相互関係の中で慣習行動として顕現するときに、その担い手である社会的行為者は、同時に知覚された差異としての社会的世界を見ることになる。即ち、ハビトゥスの内容は、社会的行為者自身が、その構造化に参加している仕方そのものであり、象徴化された世界の権力関係を吸収している」としている [宇都宮 1999:71]。

ているのだ」[セルトー 1987:140]とブルデューを批判する。ここで、ハビトゥスは「仮定されたひとつの現実」であり、「不可視の場」[セルトー 1987:141]となるために、そのサイクルの過程は十分に解明されないという危惧が残る。つまり、「最後には、これらの実践をある神秘的な現実へ、ハビトゥスへと還元してしまうのである。実践を再生産の法則のもとへおさめてしまうために」[セルトー 1987:142]との批判が向けられるのである。

この批判をより明確に言えば、「客観的構造というモデルと人々がくりひろげる一見バラバラに見える行為を結びつけて統一的に把握するために、それらを媒介するのが仮説としてのハビトゥスということになる。それは神秘的なブラックボックスにすぎない」[田辺2002b:7]ということである<sup>33</sup>。このように、ブルデューにおいて社会や秩序と行為とを架橋する鍵として考えられたハビトゥスは、一方で「不可視の場」、「ブラックボックス」に押しとどめられたと批判されたのである。

では、この批判を考慮に入れた新たな分析視座をどのように構想すればよいのだろうか。そこで次には、これまでの7つの理論的背景整理で残された問題と今後の具体的分析に向けての視座を検討したい。

### 3 残された問題—プラクティスの過程という民族誌へ

本稿の目的は、タイ社会をマクロな政治経済的な制度論の分析のみではなく、日常の相互行為を通じて社会や秩序、政治経済が生み出されていくというミクロな視点からも照射するための予備的考察とすることであった。同様の目的の為に先の拙稿[2009]では、ミクロな分析を特徴とするタイの人類学的な研究が、相互行為と社会秩序に関してこれまで如何なる議論を積み重ねてきたのかを整理している。従って本稿で

は特に、相互行為と社会秩序をめぐる問題に関して、タイの文脈を離れたより広い人類学及びその周辺諸科学が、理論的にどのような議論を積み重ねてきたのかに焦点を当てて整理してきた。ここでは、まず、先の拙稿で指摘された要点と本稿の議論を総合しながら、タイにおける相互行為と社会秩序の民族誌へ向けての残された問題の所在を改めて検討しておきたい。

先の拙稿では、タイの人類学的研究史を整理する中で、今後の具体的な分析で乗り越えるべき問題として次の4つの項目に整理している。それは、(1)「選択自由な行為観」、(2)「関係の実体論」、(3)「主観主義的相互行為論」、(4)「観念体系の構造論」の4つであった。

本稿でタイの文脈を離れたより広い理論的な背景を整理することによって、上記の4つの乗り越えるべき問題に対して広く理論的に応えていたと考えられるのは、まず、ゴッフマンによる一連の研究だったと言えるだろう。

ゴッフマンは、あらゆる共在の場面における対面的相互行為の細部を徹底的に描き出すことで、そこに社会を成り立たせている秩序の核心を捉えようとしたのである。この点でゴッフマンは、初期のエスノメソドロジーなどの主観主義的な相互行為論とは一線を画していた。つまり、特に乗り越えるべき第3の問題に対して応えようとしていたのが、ゴッフマンだった。彼は、共在の場の対面状況において、人々が間身体的で状況にふさわしい行為をいかに成すのかを重視し、そこにおける相互行為秩序が絶えず維持されていく過程の分析を精緻に練り上げていったのである。

しかしながらゴッフマンは、主観主義から脱しようとして相互行為と秩序や社会、構造との関係を問い掛ける一方で、その両者の関係を緩やかな連動関係と見るにとどまっていた。そこには、社会や構造を、独立して既にある実体として捉える傾向がかいま見られ、関係の実体論という第2の問題を併せ持ってもいたと考えら

<sup>33</sup> 田辺 [2002a:561-566] も参照。

れるのである。またゴッフマンは、身体的な行為の慣習性に着目する一方で、彼が想定する行為者像が、欧米の近代的個人主義を背景としていたため、意図的で選択自由な行為観がまだまだ色濃く出ている。この点で、第1の問題がまだまだ残されることになっていた。

本稿の理論的整理から分かることもうひとつの要点は、上記の4つの乗り越えるべき問題に、理論的に正面から取り組んでいたのがブルデューの一連の議論だったという点である。特に、第3と第4の問題、つまり、主観主義的相互行為論と、構造が行為に優先するという構造論に対して、ブルデューは理論的に深く切り込んでいた。彼は、選択自由な意識的行為論と主観主義的相互行為論を批判して退け、また構造的な体系が規則として個々の行為を決定するという構造論をも切断しようとしたのである。その上で行為と社会がいかに関わっているのかという問いに向かうために、ハビトゥスという「構造化された構造」であると同時に「構造化する構造」でもある概念を突破口として導入していた。

しかしながら、このブルデューの議論にも問題が残されていた。それは、突破口の鍵として導入されたハビトゥスという概念が、仮説にとどまり、「不可視」で「ブラックボックス」となってしまうという批判であった。

乗り越えるべき4つの問題に正面から応えていたブルデューの議論が、また新たな問題を生み出したとして批判されてしまうのである。理論的に4つの問題を乗り越えたと考えられたブルデューの議論をもってしても、新たな残された問題が指摘されると言えるだろう。

そこで本稿では、今後、相互行為と社会秩序との関係を具体的にタイの事例で分析するに際して、この批判点を考慮に入れた新たな分析視角を検討する必要に迫られることになる。そのためにはまず、ブルデューへの批判をまねく要因を考えてみたい。

「不可視」と批判されるのは、ハビトゥスが全体を統一して把握するための目に見えにくい仮説であって、その具体性が十分に明らかにさ

れないことに一因があると考えられる。具体的に目に見えるのは、ハビトゥスが母胎となって生みだされる慣習的行為、プラクティスである。しかしながら、ブルデューの理論的構えが、主観主義的な相互行為論から手を切ろうとするあまり、行為のやりとりに対する分析を十分には展開しない方向を向いていた。つまり、ブルデューにおいては行為のやりとりの過程が具体的に描かれることがなかったために、全体を把握するための仮説であるハビトゥスがブラックボックス、不可視のまま残されることになったと考えられるのである。

具体的な行為のやりとり過程を精緻に描き出したと言う点で、本稿の目的から重要な視点として再び浮かび上がってくるのは、ゴッフマンである。つまり、ブルデューへの批判を経て再浮上してきたのは、相互行為の過程というものを丹念にかつ精緻に記述するというゴッフマンの視座である。しかしながら、ゴッフマンにおいて残されていた意図的で選択自由な行為観の問題を乗り越えるために、あくまでも相互行為を慣習的行為、プラクティスのやりとりとして捉えた上で再導入しなければならない。こうして、ブルデューの議論における不可視なブラックボックスに、ゴッフマンのような丹念さで、プラクティスのやりとりに見るひとつひとつの過程を、分析の方法として導入するという理論的な突破口が見出されることになるだろう。

それは、ブルデューの議論に過程という視点を取り入れることであり、具体的民族誌記述として分析していくということである。これが、具体的な分析で新たに導入すべき視座だと考えられる。それは比喩的に換言すれば、ブルデューの議論の幹に、相互行為の過程という視座で接ぎ木し、具体的な民族誌としての葉を繁茂させようとする視座だと言えるだろう。

そして、具体的な分析においては、行為の過程という視座の接ぎ木と、民族誌として繁茂させようとした葉に、筋を通すための栄養分が、幹から流されなければならない。筋を通すための栄養分とは、プラクティスが如何に社会や秩

序を形作っていくのかという視点から主にブルデューによって練り上げられたいくつかの分析概念であろう。

それは、戦略、ゲーム感覚、模倣、身体的身振り、命名や分類、カテゴリーをめぐる差異化、卓越化、あるいはそうした差異の呈示と可視化、象徴権力などである。こうした諸点に分析の目を向けることによって、相互行為の積み重ねから社会関係や社会の秩序、社会へと架橋するひとつのあり方を、過程として可視的に描き出し得る可能性が、そこには秘められていると思われる。

例えば、ブルデューの戦略という概念は前述したように、規則や諸関係が、果たして実体としてそこにあるのかという疑問を喚起していた。つまり、住民自身の中にある民俗的な関係概念としての親族関係や婚姻関係、近隣関係、労働交換関係などは、規則として、あるいは実体的に既にそこにある構造機能的なものとして見なして良いのかという点である。そうした民俗的概念の諸関係は、規則や実体としてあるものではなく、日常の相互行為の中で、ゲームのセンスによって戦略的に、いわばある種の資源として利用されることで、社会や秩序と関係していくのではないだろうか。

また、ブルデュー自身も指摘しているように、身体的身振り、動作は、まさに不可視のハビトゥスが具体的な慣習的身体動作として可視化されるという意味で、重要な注目点となる。そしてその可視化された身体動作が、実際に多くの人々の共在の集まりの場において呈示されることによって、社会やその秩序のあり方と繋がっていくのではないだろうか。

命名や分類という分析の着目点も、プラクティスのやりとりを行う人々の間で、それと認識されていない関係のあり方などを実際に命名、明示し、分類していくという具体的な言葉や行為で指し示された時、社会の秩序へと繋がっていくという点で重要となるだろう。

こうして社会や秩序というものをマクロな視点のみならず、相互行為の過程というミクロな

地平から具体的に捉え返すという視座の重要性と、その過程の中に見るいくつかの着目点の重要性もあわせて導き出すことが出来るのである。

#### 4 おわりに

最後に先の拙稿や本稿の予備的考察から明らかになった今後取り組むべき方向を、以下の2点に要約しておきたい。それは、第1に、ゲームのセンスによって慣習的に遂行されていくプラクティスのやりとりのミクロな過程に徹底的にこだわって、より広い理論的な視野の中で相互行為と社会との連関に焦点を当てていくべきことであり、第2に、その過程を具体的な場所と時を持った行為の場所から、微細な厚い記述のタイの民族誌的記述として明らかにすべきことである。

こうしたプラクティスのやりとりという相互行為の細部に徹底的にこだわり、その究明に沈潜していくことを通して、はじめて個々の行為から立ち上げられていく社会関係や社会秩序、社会が明らかになってくるのであり、人々の行為によって担われている政治や経済のマクロな姿もより生きた形として理解されるのではないだろうか。

日本やアフリカをフィールドに人類学的な相互行為にこだわり抜いて研究を続けている菅原は、我々の「社会的な身体」が「他の身体との絶え間ない相互行為に投錨し、相互行為を通じて生成する」として、身体的な相互行為を通じて社会的な存在に生成されていく過程に着目する[菅原 2010:248]。また、「相互行為と関係は互いが互いを造る循環の運動を続ける」とし、ミクロな相互行為とマクロへとつながる社会関係、社会とが不断の循環運動を続けることを指摘している[菅原 2010:259]。そこでは、永続的に生み出されていく行為と社会との循環関係を、具体的な場の行為の過程から僣むことなく究明し続けていく必要性が説かれているのである。

筆者にとってのフィールドであるタイの具体的な場所と時におけるにおける微細な行為の過

程に着目し、その行為という地平から社会の秩序や社会との関係を民族誌的に問おうとすること、いわば「タイにおけるプラクティスの過程と社会秩序の民族誌」を厚く記述していくこと、これが、今後課題であると言えるだろう。

## 参考文献

### 日本語文献

- 宇都宮京子 (1999) 「ブルデューにおける『象徴性』と『ハピトゥス』」ブルデュー社会学研究会編『象徴的支配の社会学—ブルデューの認識と実践』恒星社厚生閣 49-76頁。
- 江原由美子 (1995) 「行為・相互行為・社会的場面」宮島喬編『現代社会学』有斐閣 8-31頁。
- オースティン, J.L. (1978) 『言語と行為』坂本百大訳 大修館書店。
- ガーフィンケル, H. (1987) 『エスノメソドロジー—社会学的思考の解体』山田富秋・好井裕明・山崎敬一編訳 せりか書房。
- ギデンズ, A. (1986) 『社会理論の現代像—デュルケム、ウェーバー、解釈学、エスノメソドロジー』宮島喬・江原由美子他訳 みすず書房。
- 串田秀也・好井裕明編 (2010) 『エスノメソドロジーを学ぶ人のために』世界思想社。
- クロスリー, N. (2003) 『間主観性と公共性—社会生成の現場』西原和久訳 新泉社。
- クロン, A. (1996) 『入門エスノメソドロジー—私達たちはみな実践的社会学者である』山田富秋・水川善文訳 せりか書房。
- ゴッフマン, E. (1974) 『行為と演技—日常生活における自己呈示』石黒毅訳 誠信書房。
- (1980) 『集まりの構造—新しい日常行動論を求めて』丸木恵祐・本名信行訳 誠信書房。
- (1984) 『アサイラム—施設収容者の日常生活』石黒毅訳 誠信書房。
- (1985) 『出会い—相互行為の社会学』佐藤毅・折橋徹彦訳 誠信書房。
- (1986) 『儀礼としての相互行為—対面行動の社会学』広瀬英彦・安江孝司訳 法政大学出版局。
- 坂本佳鶴恵 (1989) 「行為論への一視角—解釈的パ

ラダタイム (ゴッフマン・エスノメソドロジー)の可能性をめぐって」『社会学評論』40 (3) 267-280頁。

- サール, J.R. (1986) 『言語行為—言語哲学への試論』坂本百大・土屋俊訳 勁草書房。
- 権野信雄 (1991) 「ドラマトゥルギーから相互行為秩序へ」安川一編『ゴッフマン世界の再構成—共在の技法と秩序』世界思想社 33-64頁。
- 柴田直治 (2010) 『バンコク燃ゆ—タックシンと「タイ式」民主主義』めこん。
- 清水昭俊 (1995) 「価値と社会秩序—序章」清水昭俊編『洗練と粗野—社会を律する価値』東京大学出版会 1-22頁。
- 末廣昭 (2009) 『タイ—中進国の模索』岩波新書。
- 菅原和孝 (1987) 「セントラル・カラハリ・サンにおける訪問者と居住者の社会関係と対面相互行為」『国立民族学博物館研究報告』12 (4) 1031-1111頁。
- (2010) 『ことばと身体—「言語の手前」の人類学』講談社。
- セルトー, M. (1987) 『日常実践のポイエティック』山田登世子訳 国文社。
- 高城玲 (2002) 「権力を生み出すコミュニティ—中部タイの地方選挙」田辺繁治・松田素二編『日常実践のエスノグラフィ—語り・コミュニティ・アイデンティティ』世界思想社 191-212頁。
- (2009) 「タイの人類学的研究からみる相互行為と社会秩序」『国際経営論集』(神奈川大学) 38号 141-156頁。
- (2010) 「現代タイにおけるグッド・ガバナンスの一断面—相互行為の過程で語られる『良き』統治」『アジアにおけるコーポレート・ガバナンスと文化』神奈川大学国際経営研究所 27-48頁。
- (2011) 「差異の可視化と相互行為—タイの農作業における集まりの場」『歴史と民俗』(神奈川大学日本常民文化研究所論集) 27 平凡社 185-214頁。
- (印刷中) 「国家統治の過程とコミュニティ—タイの国王誕生日と村民スカウト研修の相互行為」平井京之介編『実践としてのコミュニティ—移動・国家・運動の人類学』京都大学学術出版会。
- 田中雅一 (1995) 「人類学のパラダイム—理論と親族」米山俊直編『現代文化人類学を学ぶ人のために』世界思想社 14-34頁。
- (1998) 「ヨーロッパの人類学—フレドリック・バルトの仕事をめぐって」船曳建夫

- 編 『文化人類学のすすめ』 筑摩書房 76-95頁。
- (2002) 「主体からエージェントのコミュニティへ—日常の実践への視角」 田辺繁治・松田素二編 『日常の実践のエスノグラフィ—語り・コミュニティ・アイデンティティ』 337-360頁。
- (2006) 「ミクロ人類学の課題」 田中雅一・松田素二編 『ミクロ人類学の実践—エージェント/ネットワーク/身体』 世界思想社 1-37頁。
- 田辺繁治 (1989) 「民族誌的記述におけるイデオロギーとプラクティス」 田辺繁治編 『人類学的認識の冒険—イデオロギーとプラクティス』 同文館 95-119頁。
- (1993) 「供儀と仏教的言説—北タイのプーセ・ヤーセ精霊祭祀」 田辺繁治編 『実践宗教の人類学—上座部仏教の世界』 京都大学学術出版会 35-70頁。
- (2002a) 「再帰的人類学における実践の概念—ブルデューのハビトゥスをめぐり、その彼方へ」 『国立民族学博物館研究報告』 26 (4) 533-573頁。
- (2002b) 「日常の実践のエスノグラフィ」 田辺繁治・松田素二編 『日常の実践のエスノグラフィ—語り・コミュニティ・アイデンティティ』 1-38頁。
- (2003) 『生き方の人類学—実践とは何か』 講談社現代新書。
- (2010) 『「生」の人類学』 岩波書店。
- 日本タイ協会編 (2008) 『現代タイ動向2006-2008』 めこん。
- ハーカー, R.・マハール, C.・ウィルクス, C. 編 (1993) 『ブルデュー入門—理論のプラチック』 滝本往人・柳和樹訳 昭和堂。
- 浜本満 (1984) 「現象学と人類学」 綾部恒雄編 『文化人類学15の理論』 中央公論社 281-298頁。
- ファース, R. (1978) 『価値と組織化—社会人類学序説』 正岡寛司監訳 早稲田大学出版部。
- 福島真人 (1995) 「序文—身体を社会的に構築する」 福島真人編 『身体構築学』 ひつじ書房 1-66頁。
- (2001) 「状況・行為・内省」 茂呂雄二編 『実践のエスノグラフィ』 金子書房 129-178頁。
- ブルデュー, P. (1988) 『実践感覚1』 今村仁司・港道隆訳 みすず書房。
- (1990a) 『実践感覚2』 今村仁司・福井憲彦他訳 みすず書房。
- (1990b) 『ディスタンクシオン1』 石井洋二郎訳 藤原書店。
- (1990c) 『ディスタンクシオン2』 石井洋二郎訳 藤原書店。
- (1991) 『構造と実践—ブルデュー自身によるブルデュー』 石崎晴己訳 藤原書店。
- (1993) 『資本主義のハビトゥス—アルジェリアの矛盾』 原山哲訳 藤原書店。
- (1997) 『話すということ—言語交換のエコノミー』 稲賀繁美訳 藤原書店。
- ブルデュー, P.・今村仁司・廣松渉 (1990) 「ハビトゥス・戦略・権力」 加藤晴久編 『ピエール・ブルデュー—超領域の人間学』 藤原書店 169-204頁。
- ブルデュー, P.・パスロン, J.-C. (1991) 『再生産—教育・社会・文化』 藤原書店。
- ブロック, M. (1994) 『祝福から暴力へ—儀礼における歴史とイデオロギー』 田辺繁治・秋津元輝訳 法政大学出版局。
- マハール, C. (1993) 「ピエール・ブルデュー—知の投企」 ハーカー, R.・マハール, C.・ウィルクス, C. 編 『ブルデュー入門—理論のプラチック』 滝本往人・柳和樹訳 昭和堂 34-78頁。
- 宮島喬 (1994) 『文化的再生産の社会学—ブルデュー理論からの展開』 藤原書店。
- 安川一 (1991) 「<共在>の解剖学—相互行為の経験的構成」 安川一編 『ゴフマン世界の再構成—共在の技法と秩序』 世界思想社 1-31頁。
- 山崎敬一・佐竹保宏・保坂幸正 (1997) 「相互行為場面におけるコミュニケーションと権力—<車いす使用者>のエスノメソドロジ的研究」 山崎敬一・西阪仰編 『語る身体・見る身体』 ハーベスト社 59-80頁。
- 山田富秋・好井裕明編 (1991) 『排除と差別のエスノメソドロジー—[いま-ここ]の権力作用を解説する』 新曜社。
- (1998) 『エスノメソドロジーの想像力』 せりか書房。
- 好井裕明編 (2009) 『差別と排除の社会学』 有斐閣 2009年。
- リーチ, E. (1987) 『高地ビルマの政治体系』 関本照夫訳 弘文堂。
- レイヴ, J.・ウェンガー, E. (1993) 『状況に埋め込まれた学習』 佐伯胖訳 産業図書。
- 外国語文献
- Barth, F. (1959) *Political Leadership among Swat Pathans*, The Athlone Press.
- Bloch, M. (1977) "The Past and the Present

- in the Present”, *Man (N. S.)* 12 (2): 278-292.
- (1989) *Ritual, History and Power: Selected Papers in Anthropology*, The Athlone Press.
- (1991) “Language, Anthropology and Cognitive Science”, *Man (N. S.)* 26(2): 183-191.
- Bogen, D. and M.Lynch (1990) “Social Critique and the Logic of Description”, *Journal of Pragmatics* 14:505-521.
- Bourdieu, P. (1977) *Outline of a Theory of Practice*, Cambridge University Press.
- (1979) “Symbolic Power”, *Critique of Anthropology* 4: 77-85.
- (1983) “Erving Goffman, Discoverer of the Infinitely Small”, *Theory, Culture and Society* 2(1):112-113.
- Garfinkel, H (1967) *Studies in Ethnomethodology*, Prentice Hall.
- Giddens, A. (1984) *The Construction of Society: Outline of the Theory of Structuration*, Polity Press.
- Gofman, E. (1974) *Frame Analysis: An Essay on the Organization of Experience*, Harper & Row Pub.
- (1983) “The Interaction Order”, *American Sociological Review* 48(1): 1-17.
- Kapferer, B. (1976) “Introduction: Transactional Models Reconsidered”, in Kapferer, B. (ed.), *Transaction and Meaning: Directions in the Anthropology of Exchange and Symbolic Behavior*, Institute for the Study of Human Issues.
- Kendon, A. (1988) “Goffman's Approach to Face-to-face Interaction”, in Drew, P. and A. Wootton (eds.), *Erving Goffman: Exploring the Interaction Order*, Polity Press, pp.14-40.
- Lynch, M. (1993) *Scientific Practice and Ordinary Action: Ethnomethodology and Social Studies of Science*, Cambridge University Press.
- McCargo, D. and Ukrist Pathmanand (2005) *The Thaksinization of Thailand*, NIAS Press.
- Moerman, M. (1988) *Talking Culture: Ethnography and Conversation Analysis*, University of Pennsylvania Press.
- Nostitz, N. (2009) *Red vs. Yellow Volume1: Thailand's Crisis of Identity*, White Lotus.
- Ortner, S. (1984) “Theory in Anthropology since the Sixties”, *Comparative Studies in Society and History* 26 (1): 126-166.
- (2006) *Anthropology and Social Theory: Culture, Power, and the Acting Subject*, Duke University Press.
- Pasuk Phongpaichit and Baker, C. (2009) *Thaksin (Second Edition)*, Silkworm Books.
- Takagi, R. (1999) “Interaction and Power Relations : A Village Head (*kamnan*) Election in Central Thailand”, *Tai Culture* 4(1): 153-168.
- Tambiah, S.J. (1985) *Culture, Thought, and Social Action :An Anthropological Perspective*, Harvard University Press.
- Wasan Pannyakao (2000) (in Thai) *Chiwit Khang Thanon: Kan Su'ksa Choeng Chatphan Wanna Wa Duai Phu Chom Thorathat Yam Khamkhu'n Bon Thanon Sai Nu'ng Nai Mu'ang Chaing-Mai* (路上往來の生活—チェンマイ市の路上における夜間のテレビ視聴者に関する民族誌的研究), ChaingMai University.